

	人間が行う美学	機械が行う美学
人間が行う芸術	A	B
機械が行う芸術	C	D

※人工知能美学芸術宣言は、「D」を問題としている。
※中ザワヒデキは、「D」を待望している。

- A…例：ルネッサンスの美学・芸術
- B…（参考：解析的アプローチ）
- C…（参考：自己生成系アート）
- D…該当なし

そもそもカントの美学の二大対象である「自然的雄大」と「数学的論理」は、いずれも非人間の創造物だった。従来美学は（非人間の創造物が対象であっても）「人間が行う美学」として人間主義が担保されていた。従来芸術は（非人間の創造物に対抗して）「人間が行う芸術」として人間主義が担保されていた。

Aは従来美学と従来美術の場であり、近代以降の主流芸術をほとんど詰め込める。これはDの対極である。

Bは厳密な意味ではまだ実現していないが、黄金比による解析や20世紀初頭の形式主義美学など、人間の主観に軸足を置かないアプローチを参照することができる。（機械が行う美学に照らして人間が芸術を行った時が厳密な意味でのBの実現。）

Cは厳密な意味ではまだ実現していないが、人間が人工知能プログラムのDeepDreamやAaronに絵を描かせ、それを人間が鑑賞するという昨今の流行を参照することができる。（人間が行う美学に照らして機械が芸術を行った時が厳密な意味でのCの実現。）

Dはまったく実現していないが、やがて実現するだろうとの推断が、中ザワに人工知能美学芸術宣言を書かせた。このとき、美学を行う者は人間とは限らないとして「B・D」が出現、芸術を行う者は人間とは限らないとして「C・D」が出現する。それら二領域の重なりとしてDが現れる。

以上は6月19日に開催された第1回AI美芸研での全体討論会の感想として、宣言英訳者の松下学が中ザワに書き送ったメールから発展したAI美芸研のアジェンダで、まだ手直しが必要かもしれないところからβ版として2016年6月26日にSNS上で発表するものです。